

優しく強い子に！



<http://www.minamih.net/>
21・9・26(日)
南NEWS no 64

『学童保育と子どもの放課後』

増山 均 新日本出版社

P 206～208

(1) 子どもたちが求めている三つの「あ」
「あるがまま」「あこがれ」「あてにされる」

「あるがまま」

一人ひとりの子どもたちが成長していくときに「あるがまま」の姿を受け止められ、認められるということは最も重要な土台である。子どもたちの成長は自尊感情と自己肯定感を必要とする。自分自身を取り巻いている人間関係の中で、親や周りの大人から愛され、支えられ、認められているという実感の中で、自尊感情と自己肯定感が育まれる。



一人ひとりの子どもの「あるがまま」の姿を受け止める第一の大人は、何よりもまず両親でありたい。しかし、我が子を「しっかりとした大人に育てる」という課題を担っている親にとって、頭では分かっているが、なかなか我が子の「あるがまま」を認められないことが多い。それは、我が子に、生きていくために、必要な知識や技術、コミュニケーションの力、生活習慣、社会的なモラルを身につけ、少しでも成長・発達していったほしいと願うため、いつまでも我が子が「あるがまま」の姿でいたのでは困るからである。子どもを『育てる』という営みは、『あるがまま』を認める」という課題と矛盾しやすく、子育てをする親だからこそ、子育ての責任を果たそうとするが故に、我が子の「あるがまま」の姿を認められにくいという難しさがつきまとっている。

そこで「子育て」をする親の近くに、子どもの「あるがまま」を認め、受け止めてくれる人や場所があると心強いものである。子どもたちが「あるがまま」の姿でいられる場所としての「子どもの居場所」が必要なのである。

「あこがれ」

子どもの居場所では、同年齢の子どもたちだけでなく異年齢の子どもたち、発達段階の上の年代との交流があると心強い。乳幼児期の子どもと児童期の子どもとの交流、児童期の子どもと青少年期の子どもとの交流、さらに子どもたちが高校生や大学生・若者とともに遊び・学び・交流する機会をつくりたいものである。同年齢の子ども同士との交流だけでなく、発達の先の段階にいる年代との交流は、子どもの中に、「あこがれ」の対象を生み出すからである。

子どもは、外からの力によって育てられるのではなく、自分自身の中に、目標を取り込み、発達課題を取り込むことによって、その目標に近づいていきたい、そのようになりたいという願いと意欲に導かれ、自ら育っていく。

子どもたちは、教科書のマニュアルによって育てられていくのではな

い。自分の生活の中で、近くにいる人の中に「生きた人間の教科書」を見いだすことによって、その人に「あこがれ」を感じ、近づいていきたい、一緒にいたい、そのようになりたいと強く願うことによって育っていくのである。

学童保育や地域の青少年団体活動の取り組みの中でよく観られることだが、年少の子どもたちは年長の子どもたちの中に「あこがれる存在」を見いだす。

中学生や高校生が来て一緒に遊ぶと、幼児や小学生たちの活力が増し活性化する。子どもの放課後活動や子ども会活動に大学生や若者が加わると、子どもたちの興味・関心・意欲が引き出される。子どもたちにとって、学生や若者は「親しみやすい先輩」であり、気持ちの分かるお兄さん・お姉さんだからである。親や大人とは違って、また育ての専門家とも違って、彼らが未来の手本、すぐ手が届きそうな手本であり、その姿に明日の自分を見ることのできる「生きた手本」だからである。

「あてにされる」

人間の生きがいにとって重要な要素は、日々の人間関係の中で「あてにされる」ということである。「あてにされる」ということは、子どもの育ちにとって重要な要素である。人間関係の中で「あてにされる」ということは、そこに自分の役割と出番があり、自分の立場があるということであり、立場に付随した責任があるということである。どんなに小さくとも、人間は「役割」をもち、「出番」が与えられ、「責任」を果たすことにより、「立場を獲得しつつ成長していく。家庭でも、学校でも、職場でも、地域社会でも、「あてにする—あてにされる」という人間関係の中で自尊感情も憧れも強まっていく。

今日の子育てと教育で問題なのは、子どもたちは守られ、サービスを与えられ、教えられる存在であっても、「あてにされる」存在ではなくなったということだ。家庭と学校、地域社会の生活の中に、役割と出番が失われた子どもたちは、いわば、「失業」の状態にある。失業者が居場所を失うと、たちどころに難民化してしまうのである。

南の活動の中で子どもたちは「あるがまま」受け入れられ、できたことは賞賛され・認められ、課題は励まされる中で自らの力で克服し、成長しています。

低学年の子どもたちは高学年の子どもたちのプレーする姿に「あこがれ」、高学年の子どもたちはシンジ先輩コーチ・テツヤ先輩コーチに「あこがれ」、目標や発達課題を取り込み、達成を自らめざしているのです。

それぞれの発達段階において、練習や試合の中で、チームメイトとして、互いに「あてにする—あてにされる」という仲間の関係で、自尊・他尊の感情を育んでいくのです。学び合い・育ち合いがあるのです。

増山氏の著書を読みながら南の活動を思い浮かべ、オーバーラップさせていました。



